

平成26年6月20日(金)

老球の細道 25

『生きること・・・途方もない贈り物』

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

先日の会津総体成年男子の部で「会津サーティーズ」(創設した時は30代のメンバーだったが今では50代60代の年齢になってしまった)が故佐々木昭夫氏(前会津バスケットボール協会顧問)を偲んで結集した。大会のプログラムにも「佐々木昭夫」としっかりエントリーされていた。かつてのチームメイト達は佐々木氏を偲びながら年齢を感じさせない往年の名プレーを披露してくれた。彼も天国から眺めて、あの独特な笑顔で「俺もまぜてくれ」とぼやいていたのではないだろうか。改めて合掌。

私にもいずれその時がやってくる。日頃、私たちは他人事のようにしか死を受け取めていないが、身近な人で大切な人の死は、改めて自分の順番ももうすぐであることを意識させられる。それにしても、死は必ず誰にでもやって来るといふ冷徹な現実を受け入れることは非常にむずかしい。自分自身が死の宣告を受けた時、私の愛する人が死に直面した時取り乱さずに対処できるだろうか。人間ドックなどの健康診断で「要精検」(ガンの疑いあり。精密検査が必要)の通知を受けただけで、突然悲劇の主人公に変身してしまう弱ツカスの私には無理だろう。その日が来たときのために、死に対する考え方をきちんと確立しておかなければならない。

人間の最大の苦であり、誰もが必ず迎えなければならない現実で、しかもそれがいつだかわからない。そんな死について時折考えてみることも必要だ。ある作家の死生観がある。「ボクはいつか死んでしまうので、出し惜しみはしないことにしています。

ボクはいつか死んでしまうので、使い切れないお金を稼ぐために頑張ろうとは思いません。ましてやお金のために人を悲しませようとは思いません。

ボクはいつか死んでしまうので、土地を巡って誰かと争おうとは思いません。あの世に持っていけるものなどひとつもないのですから、争うぐらいなら笑っていようと思います。

ボクはいつか死んでしまうので、嫉妬やイライラはやめました。その分、空の色や鳥の声をしっかり受け止めようと思います。

ボクはいつか死んでしまうので、生きることをいつも考えていたいと思います。鮮やかな一瞬に恋しています。

ボクはいつか死んでしまうので、わずかな才覚でも有効に使いたいです。それで誰かに喜んでもらえたら、死ぬ時はきっと微笑んでいることでしょう。

父さん、母さん、産んでくれてありがとう。生きるって、途方もないプレゼントだったんだね」

死は人間にとって最大の苦であり、誰もが必ず経験しなければならない。しかし、それはいつやってくるかわからない。そんな忌まわしい死であるが、前述の死生観を持つことによって、限りある人生を豊かにさせてくれる哲学として利用することもできる。あるコーチは言っている。「死を意識することこそ最高のメンタルトレーニング。死ぬ気になれば何でもできる」。死を身近に感じることによって、人生に終わりがあることを意識させられる。日々の時間を大切に使い、数少ないチャンスを絶対に逃がさない。次はない。今、この瞬間に全力を尽くす(而今)。毎日生きていられることはあたりまえのことではない。